

## かわらけの見分け方など

発掘現場でもっとも見かける遺物はかわらけです。素焼きの土器で「儀式のときに使い、そのまま捨てられる」「手づくねは糸切りより古い」などと聞いたことがあります。

今回、かわらけについて文化財課の職員から説明を伺い、写真を撮らせていただきました。

### 1. かわらけは時代によって異なる

#### ① 鎌倉時代より前

頼朝が鎌倉に入る前から当時の人はかわらけを使っていた。外側にろくろの跡がしっかりと残り、サイズが大きく厚い。



【外側にろくろの跡が残る】



#### ② 鎌倉時代 初期～中期

手づくねと糸切が混在、砂っぽくザラザラしている。13世紀中ごろまでに手づくねはなくなる。



#### 13世紀中期のかわらけ

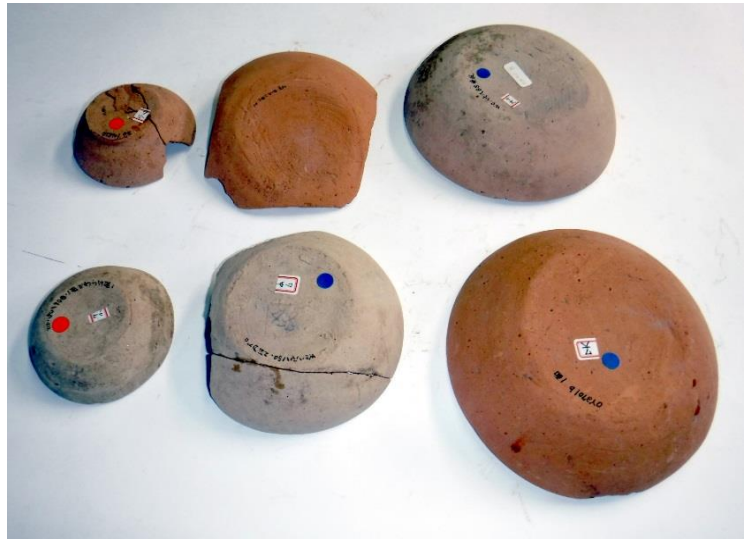
右が手づくね、左はろくろ製（糸切底）。右の手づくねは底が丸く形にゆがみがある。

・かわらけの色は、黄褐色（茶系）、焼く温度や粘土の性質・埋まっている環境により色は変化する。

### ③ 鎌倉時代 後期

大量生産のため手づくねは無くなり、かわらけは最も洗練されたものになる。形は薄く、大・中・小と種類は豊富になる。

(鎌倉時代 最盛期)



### ④ 室町時代

新たな時代となりかわらけは分厚くなり繊細さがなくなる。



### 2. かわらけは「使い捨て」ばかりではない

かわらけは儀式で使いそのまま捨てるだけでなく、日常的に使用されていた。発掘作業で「かわらけ溜まり」でなく、散在して出てくるかわらけは日常使用されたものもある。

### 3. かわらけの工房は鎌倉の近く？

古墳時代の土器は埼玉や群馬あたりで作られたと聞いたことがあり、「かわらけもその辺で作ったのですか？」と尋ねたところ、鎌倉付近で作られたようでかわらけ工房としては、一調査地点を除き確認できていないとのこと。